

6章 consciousness

Aspects of consciousness(意識のさまざまな形)

初期の心理学者…「意識」＝「心」(ヴントの内観主義)

しかし意識だけが心ではない。むしろ、われわれの心の見えない部分こそが大切なのでは？

Consciousness=意識

意識には2つの側面がある

- ①『知覚、記憶、思考が意識上に表象されるように、自分自身の周りの環境を監視すること。
=monitoring
- ②『行動や認知的活動を開始して終了することができるように、自分自身や周りの環境を制御すること。=controlling

Preconscious memories=前意識的記憶＝周辺の注意(非意識的モニタリング)

意識上に進入可能な記憶。思い出そうとすれば思い出せる。

Ex.今日の朝何食べたっけ？単語の意味など。

ランチ・ライン効果 cf.カクテルパーティー効果

友人と会話中、他の人たちの会話や雑音は無視している状況にあるにもかかわらず、自分の名前などを聞くと、そちらに注意が向くこと。

→これらの刺激は、『意識下で』私たちに影響を及ぼし、非意識水準において作用していると考えられる。

cf.カクテルパーティー効果…カクテルパーティーのような、複数の音源があるようなところで、その中から自分の聞きたい音声だけを選択・抽出し、聞き取れること。

The unconscious =無意識

意識上に進入することのできない記憶や衝動、願望などのこと。

この記憶や衝動、願望は抑圧され(無意識に追いやられ)、夢や非合理的行動、わざとらしさ、言い間違いなどに姿を変え、私たちに影響を及ぼす。フロイト(Sigmund Freud)

フロイト的言い間違い

「非意図的発言を言及するのに使われ、隠された衝動が表に現れたもの」と仮定される。

Ex.『あなたが元気で私は悲しい』←『あなたが元気で私はうれしい』

『議会を閉会します』←『議会を開会します』

詳しく知りたい人は、『精神分析入門 上』(新潮文庫)を読んでね。

フロイト曰く、

「記憶や衝動、願望が抑圧されてしまうことで精神障害が作り出されてしまうのでは？」

→「それじゃあ、抑圧された内容を意識上に導き出してあげれば治るんじゃない？」

→精神分析

→実際にたくさんのヒステリー患者が回復。

今日では、ほとんどの心理学者が内省的な方法で想起できない記憶や精神過程が存在し、そしてそれが無意識であるということを認めている。

しかし、フロイトは無意識の情動的な負荷を負う側面のみを強調していて、ほかの側面はほとんど考慮していない。←そこんどこどうよ?(たくさんの心理学者たちの声。)

ほかの側面…無意識には膨大な種類の精神過程があり、私たちは日常生活で、一貫してそれらに依存しており、しかし意識的に進入できない。(Kihlstrom 1987)

Automaticity and dissociation = 自動性と解離性

自動性…元々は意識的な注意が必要とされた反応が習慣化されること。

Ex. 自転車や、車の運転、ピアノの演奏など

→制御が依然として存在してはいるが(そうしたいと望めば自動的処理に注意を向けることができる)、しかしその活動は意識から解離されている。

解離性…「ある条件下において、思考や活動のいくつかは、意識から切り離されて、意識のないところで機能する。(Pierre Janet 1889) cf.フロイトの抑圧の概念

Ex. ・強いストレス下の状況に直面したとき、効率的に機能するために一時的にその事態を意識から追いやる。

・ 退屈なときに、空想や白昼夢に陥る。

→軽い解離

・ 解離性同一性障害 →極端な例(詳しくは 15 章を見てね☆)

余白の美？

訂正：発表中に、ユングと劣等感について言及いたしましたが、間違っただけを言っていました。すみません。そこで、ちょっくら、付け加えたいと思います。

ユングの理論の中にはコンプレックスという言葉がありますが、これは劣等感という意味ではなく、個人的無意識の中にある一定の強い感情(たとえば悲しみとか)を中心に集合し、感情や行動などに強い影響を与える観念や記憶の集合体をいい、「観念複合体」と訳されるものです。私は、このユングの「コンプレックス」をアドラーの「劣等感」と混同してしまいました。

アドラーの「劣等感」とは、「理想の自分に、自分は追いついていなあ…うーん、悔しい」って感じのものだそうです。現在の劣等感(=他人と比べて自分は劣っていると感じること)とも、比較の対象が自分か他人かというところがちょっと違いますね。

乱文申し訳ありませんでした(>_<)